『伊文字』

――その変遷――

下房俊一

一

一人の男が妻のことを祈請して、殊勝そうな女にめぐりあう。「そうな」といったのは、しかしながら、祝言をおえてめでたく対面とて被をとるや、類まれな醜女であることの露見するを常とするからである。はやまって一生そいとげようなどとちかわねばこそ、ただひたすらににげまわる男を、女は執拗においまわして追入りにする。

およそ、狂言に登場する神仏ほど信頼に値せぬものはない。気にいった女はおのれが先どりして、われわれにはろくなのを妻あわさないのだから、「観世音も観世音じや」などと悪態をつかれたとて、文句のいえた義理でもあるまい。もっとも、それぐらいのことは、狂言の観衆はもとより承知の上であった。だからこそ、もはや霊験おとろえた神仏を罵倒するよりも、なおそれにすがろうとするふがいない男を嘲笑しつつ、予想される顛倒への期待に胸をおどらせていたではないか。この男が幸運をつかむことをねがっているものなど、だれもおりはしない。

ところが、『伊文字』にかぎって、観衆の期待はみごとに裏ぎられる。『伊文字』の男は、やはり、清水観音の霊

夢をこうむって、しかるべき女性にめぐりあう。太郎冠者をつかわして国元をたずねさせると、「恋しくはとうてもきたれ伊勢の国伊勢寺本にすむぞわらはは」（和泉流は「とうてもきませ」）と歌をよんで、その女は姿をけす。咄嗟のことで、二人は女をみうしなったばかりか、肝腎の歌までもわすれてしまっていた。途方にくれた主従は、かろうじておぼえていた、「恋しくはとうてもきたれ、い」だけを手がかりに、関をすえて道ゆく人に後をつがせる算段をする。『伊文字関』（天正本）の由縁である。その後は、一人の聡明な旅人の推理にたすけられ、ようやく歌をおもいだしてめでたく一曲はおわるばかりである。

主従が女の宿をさがしあてて云々といった展開が、たとえ特殊な演出としてでも、かつて用意されなかったことは、この狂言の配役上の特徴からはっきりしている。たとえば、虎寛本によれば、女と旅人とをおなじ役者が演じることになっていて、着込・箔・角頭巾・厚板姿の前ジテが中入後、箔をぬぎ狂言上下をつけ塗笠をきて、後ジテとして再登場する。この演出は現行大蔵流においても継承されているし、和泉流でも、同流の祖本たる天理本『狂言六義』においては、やはり同一人が演じていた証左がみいだされる。それは、おなじく妻ごいをテーマにした曲『二九十八』において、

一人出て妻のなきよし云テ・清水に籠・いづれもやうす・伊文字に同前・太らくわじやのなき物也

という常の演出に対して、

此狂言伊文字ノことく三人してスル事あるへし

という注記のあることである。近世初期の和泉流にあっては、『伊文字』は『二九十八』の別演出とおなじく、主と

太郎冠者と女（旅人）の三人のみで演じられていたのである。ちなみに、そのことは後世の小早川本においても、

此女人少ナルトキハ、シテ初メニ箔ヲカブリ出タル例アリ　（古典文庫）

と、痕跡をとどめている。このようにシテが旅人の装束の上に箔をまとってすませたのは、当初は「人少ナルトキ」の臨時の措置ででもあったであろうが、それが可能であったのは、登場して歌をよむだけの女の役のかるさによるのであり、具体的にいえば、他の妻ごいの曲のように、ふたたび女があらわれて被をとる必要のなかったことをしめしているのである。

なお、いささか注意を喚起したいのは、右にひいた虎寛・小早川両本において、また、現行の二流にあっても、いずれも旅人がシテとなっている点である。女の役をもかねるとすれば、女がシテという、狂言では異例の演出となるが、通例をおかしてまでこの旅人が妻ごいの当人よりもおもい役をおわされているには、相応の理由があってしかるべきである。たしかに、このシテが「おもひもよらぬ関守に仲人するぞをかしき」の次第以下、国の名、里の名をこたえる件は、一種優雅な情趣のただよう場面であり、それだけに熟達した演戯力のもとめられること、いうまでもない。しかし、問題は旅人が形式上シテであるかいなかでは実はなく、こうしてかれの演戯に一曲の中心がおかれていること自体であり、そのことはまた、この曲に当然予想される展開が用意されていなかったという問題にたちかえることにもなる。

女にあって宿をたずねたがそれをわすれた、旅人の知恵をかりてようやくおもいだした、と、いえば筋書はこれ以上のものではない。『伊文字』は、例の寛正五年の糺河原勧進猿楽にも上演されているふるい曲である。当時の観衆は、一体、この曲のどこに「をかし」をみたのであろうか。

二

……あれ躰の者をば、すかさばやと思ひ、「それはさる事も候はん。今はこれにては、人目もしげし、わらはがさふらふ所へ、とふて入らせ給へ」とありければ、「いづくにて候ぞ」と問いければ、調子のことばをかけ、それをふくせんその内に、逃げばやと思召、「わらはが候所をば、松のもとゝいふ所にて候。」物くさ太郎是を聞き、「松のもとゝは心得たり、明石の浦の事。」かゝる希代の事はなし、是一つをこそ聞き知るとも、余の事は知らじと思ひて、「たゞし日暮るゝ里に候ぞ。」「日暮るゝ里も心得たり、鞍馬の奥はどの程ぞ。」「これもわらはがふる里よ、ともし火の小路をたづねよや。」「油の小路はどの程ぞ。」「是もわらはがふる里よ、はづかしの里に候よ。」「しのぶの里とはどの程ぞ。」「これもわらはが故里よ、うはぎの里に候。」「錦の小路はどの程ぞ。」「是もわらはがふる里よ、なぐさむ国に候は。」「それは恋してあふみの国はどの程ぞ。」「けしやうするくもりなき里」とのたまへば、「鏡の宿はどの程ぞ。」「秋する国に候よ。」「因幡国にはどの程ぞ。」「これもわらはがふる里よ、はたちの国に候よ。」「若狭国にはどの程ぞ。」かやうにとかくいふ程に、此上はわが身のがるべきやうなし。……

御伽草子『物くさ太郎』（古典大系）の一節である。ここには女の宿元をめぐって、といつめる太郎といいはぐらしてにげようとする女房との、生身の人間同士の熾烈な対決がある。応答はさらにつづく。

女房、時刻移りてかなはじとおぼしめして、またかくなん、
　思ふならとひても来ませわが宿はからたちばなの紫の門
物くさ太郎此御ことばを案じ、少ゆるす所に、ふりはなし、笠をも御衣裳など迄もうち捨、うらなしをもふみぬぎ、かちはだしにて、下女をもつれず、ちり〳〵になりて、逃げられけり。

太郎はすぐ後をおうが、案内しった女房は、あなたの小路こなたの辻とにげまわり、遂に姿をけしてしまう。このときの太郎の落胆ぶりは想像を絶する。おのれのおとした餅を地頭にひろわせんとするほど不敵で、一目見た女房に大

道でいだきついたほど厚顔なかれが、「こなた向きにこそ、女房は立たりつれ、あなたへ向きて、かやうの事をばいひつれ」などとくり言をもらしたのは、後にも先にもこの一時より例をみない。そのときふとおもいだしたのは、女房の「からたちばなの紫の門」という歌であった。かれは「ある侍所」をおとずれ、「七条の末に、豊前守の殿の御所こそ、からたちばな紫は有しぞ」とおしえられ、ようやくたずねえて再会をはたすことになる。

『物くさ太郎』の求婚譚は、「思ふなら」の歌が「恋しくは」とまったくおなじパターンであることをはじめとして、いくつかの重要な点を『伊文字』との間に共有している。ことに、太郎は『伊文字』の男とはことなり、清水観音のたすけをかりず、むしろ観音の縁日を利用して辻どりを強行し、女のかけた数々の謎はよどみなくときおおせ、よみかけられた歌にはすばやく返歌をするなど、はるかに積極的で有能であるにもかかわらず、「思ふなら」の歌にかぎって反応することができず、女をみうしなってしまう。しかも、この歌の意味はついにみずからの知恵のおよばぬところで、「ある侍所」の援助をこわなければならなかった点、『伊文字』の男が旅人をたよったこととえらぶところがない。これはおそらく、一中世小説の主人公の性格の破綻といった単純な問題ではなく、かれの遺伝的にせおってきた宿命とかかわりがあろう。

三

いま、それをしる手がかりを女房との謎問答の中にもとめてみよう。列挙された応答の最後のものは、「はたちの国に候よ——若狭国にはどの程ぞ」であった。この点に注目すれば、ただちに、

恋しくばはたちの国のはたちの町腐らぬ橋の三丁目の涼しの屋　（日本昔話集成）

などという昔の歌の記憶がよみがえる。例にあげたのは岐阜県吉城郡上宝村につたわるもので、乞食が偶然であった女からおくられたものという。はたちの国のはたちの町は若狭国若狭町、腐らぬ橋の三丁目は石橋三丁目、涼しの屋は団扇屋のことで、乞食は姿をけした女をそこにたずねて、のち団扇屋の聟となっている。この種の民話は全国にひろく分布していて、ただし、おおくの場合「はたち」ではなく、「十七」または「十八」と記憶されている。二三、例をあげれば、

恋しくば尋ね来て見よ、いつも十七、腐らぬ保たぬつち皿屋、店の暖簾にかけの姫――若狭国の瀬戸物屋の娘かけ
（神奈川県津久井郡内郷村）

恋しくば尋ね来て見よ、十七の国、腐らぬ橋のたもとにて、夏鳴く虫のぼた餅――若狭国石橋の蟬屋の娘はぎ
（山梨県西八代郡上九一色村）

恋しくばたづねてござれ、十八の国、くさらぬ橋をふみ越えて、夏なく虫の冬ごもり、秋さく花――若狭国石橋の蠟屋の娘きく
（山口県大島郡）

などが報告されている。また、若狭以外に関するものでは、

恋しくば、九つ山の一つ山、夏吹く風に尋ね来て見よ――富山の扇屋
（岡山県御津郡今村）

恋しくばたづねて来い、所は讃州金刀比羅の、杓ぬけ町の、このこのし――榎内町の孫四郎（徳島県三好郡三縄村）

があり、後者は歌の主が男の方というめずらしい例であるが、いずれこの歌をヒントとして恋の相手をたずねゆくことにかわりはない。

歌、といったが、実はこれらの句は到底、普通の意味で歌といえぬほど定型を無視している。それは、あながち民

話をつたえてきた人々の無教養にのみ帰せられるべきことではなく、おそらく当初は定型もしくはそれにちかい型であったのを、雑多な謎の言葉を貪欲に吸収しつつ発展させてきた結果とみるべきであろう。謎はわが国において貴賤上下をとわずいちじるしく愛好された遊戯で、文芸の世界へもこのんでとりいれられたのであるが、この種民話においても実にさまざまな開花の様相をしめしているのである。

こうして、女ののこしてさった謎の歌をめぐって展開するのが、十七若狭型の民話であるが、この型が他の難題聟の話から区別される別の特徴の一つは、謎をとくにあたって、按摩、座頭、六部、和尚などという人々の援助がもとめられている点である。物くさ太郎の性格を決定した要因は、謎歌のこのとき手というものが、おそらく、他ならぬかつてこの種の話を管理していた人々の分身であったがゆえに、かならず一度は顔をだすという、ぬきがたい伝統ではなかったであろうか。それが、「ある侍所」であったのは、民話において「巡査のやうな者」まで登場しえたと同様、時代の嗜好にしたがったまでで、要は、一般民衆より多少の知識をもって謎をときうる人であればよかったのである。

四

このようにみてくれば、狂言『伊文字』で歌関をすえることの意味もわかってくる。もとより荒唐無稽なつくりごととしてのみ狂言をとらえがちのわれわれは、わすれた歌のために関をもうけるという発想を奇抜だとさえ感じなくなっているが、実はまことに奇抜なこのおもいつきにも、それなりの説明が可能なわけである。すなわち、この関をとおった旅人とは、他でもない、謎のとき手としてあらわれた、按摩であり、座頭であり、六部であり、和尚であっ

たということである。さらにいえば、狂言『伊文字』とは、わすれた歌をおもいだすことに主眼があったのではなく、妙ないい方だが、よみかけられた歌を、わすれることにおいて「い」という謎としてとらえなおすところに端を発する謎物語ではなかったであろうか。そういえば、「い」からおもいついて「伊勢国伊勢寺本」なる正解にいたるまでには、伊予・因幡・出雲・樣本・井手など、さまざまな地名が列挙されたのであった。通商圏の急激な拡大をみた時代にいきた観衆なら、舞台の進行につれてともに首をひねったり膝をうったり、あたかも節用をくるようなおもいで、耳学問をたのしんだにちがいない。そうして、謎ときの醍醐味をあじわいつつ、国里ともに「い」を頭にもつ地名をくみあわせえたとき、舞台の男や旅人におとらぬ満悦をおぼえたことであろう。

しかし、もし観衆をそれほど熱中させえたとすれば、『伊文字』がまさしく単に「い」文字という謎であるかぎり、さらに別種の解答が用意されていたとみるべきではなかろうか。「い」文字だけからただちに国里の名を連想するのは、まだはやすぎるとおもうのである。その痕跡はわれわれの目にしうるテキストにも、かすかながら、しかし、確実にみとめることができる。たとえば、虎明本によれば、

〈伊勢の国のことやらん　〈それ〳〵、さらはぎんじてみう　〈恋しくは、とふてもきたれいせの国、い、又いでつまつた
〈思ひ出た、とうしんひきの娘であらふ　〈れうじな事をいふ人じや、其子細は　〈いでつまつたほどに、（古本能狂言集）

とある。（ちなみに天理本では、この件は国の名をこたえる前にある。）周知のごとく、藺は燈心の原料であり、「トウシングサ」あるいは単に「トウシン」とは藺そのものの異名でさえあるほどで、「い」文字から燈心を連想するのはごく自然なことである。しかしながら、燈心ひきの娘というこの解は、たまたまのこったほんの一例にすぎないであろう。「いもじ」といえば、後奈良院撰『なそたて』に「かなかしら」ととくごとく、それこそ四十八字の頭として注

目された文字ではあり、なおさまざまな解がおこなわれていたかとおもわれる。そうして、さらに想像をたくましくすれば、この件は、『仁王』の参詣人の祈願の内容がいまもそうであり、『清水』の太郎冠者の要求項目がかつてお そらくそうであったごとく、時の演者の自由な裁量と機智でもって、いくらもさしかえ可能な部分としてあって、謎ときの興味をもりあげていたのではなかろうか。国里の名については虎寛本にも「この外何程も有るべし」、「着合をかんがへていふべし」と注記するのと同等である。その中にあって、燈心の連想は当時きわめてポピュラーであったがゆえに、一見なんでもないようなこの一節が、各時代各流派のテキストを通じて、化石的につたえられてきたものであろう。

実際、藺と燈心との連想は、『伊文字』一曲の独創ではなかった。親が子に仮名をおしえることを主題にした曲『以呂波』にも、

〽……さらは一字づゝおしへう、い　〽とうしん　〽それはなんといふ事ぞ　〽いをひけばとうしんがでまする

（虎明本）

という会話がみえる。また、『七十一番歌合』四十番「燈心うり」には、

月に寝ぬとうしみ売の身の業を誰聞しらぬいびきとかいふ

（新校群書類従）

とあり、平出氏旧本『誹諧連歌抄』や『竹馬狂吟集』には、

いひきの音そたかくきこゆる
となりにはとうしみうりの宿かりて（とうしみうりやとまるらん）

という同想の付合をのせている。

ところで、右にあげた狂言・狂歌・誹諧の例において、いずれも単に、藺――燈心、という関係ではなく、藺をひく――燈心、という関係になっていることに注意したい。そういえば、『七十一番歌合』のいま一首の歌にも、

とうしみの契やすきをためしにていざさバ人を先引てみむ

と、燈心の縁語として、「ひく」がもちいられているのであった。勿論、「藺」だけで燈心への連想は十分はたらきえたのであるが、しばしば「燈心」に対して「藺をひく」ということばが連想されたものとすれば、いま一度『伊文字』のテキストにたちかえって検討しておく必要があろう。

虎明本では、前述のごとく、「いでつまったほどに」燈心ひきの娘であろうという。しかし、虎明本よりふるい形態をのこしているとかんがえられる天理本では、

是ハ・伊をひいてつまるほどに・とうしんひきの・むすめであろう

となっている。ちなみに、三百番集本でもおなじで、「其様に伊を引いてつまるならば、燈心引きの娘であらう」といっている。この点に関して、虎明本と天理本といずれが古態であるかはとわない。要は「伊をひいてつまる」ような演出がなされていたことが確認できればよいのである。では、実際の舞台の上で、いをひいてつまる、とはどういうことであるか。京都大学国文学研究室に、幕末頃の写本とおもわれる『狂言』と題する全三冊のテキストを蔵する。和泉流のものでないことはたしかだが、われわれのしる大蔵流ともややことなっており、あるいは鷺流かその他の群小流派に属するものかとおもわれるが、くわしい調査にいたっていない。このテキストで参考になるとおもわれ

るのは、太郎冠者が、

恋しくはとふても来れい引すむそわらはゝと仰られましたが中を忘れまして御座ります

といっていることである。この点、三百番集本もかわらない。太郎冠者は「とうてもきたれ」まではおぼえていてよどみなく報告することができたのであるが、「い」以下をわすれてしまったのであった。であれば、当然この「い」を強調していう結果、たとえテキストに「い引」となくとも、実際にはそのように発音したであろうこと、『以呂波』の場合とおなじである。まさに、「い引」の音のみたかくきこえたはずである。そうして、関所をとおりかかった旅人も、そのようにきいたからこそ、燈心ひきの娘ではないかとうたがったのであった。

ここにおいて、空想を飛躍させれば、そもそも夢想の女自身、「い」としかいわなかったのではないかとさえかんがえることが可能である。『天満千句』に、

国里をくはしく尋て候へば　利方
いの字といふて跡かたもなし　宗恭

（古典俳文学大系3）

という付合があり（佐竹昭廣氏の御教示による）、これは右の仮説を支持するかもしれない。現に、「そのあとは聞きませなんた」と太郎冠者が断言し、主も「身共もその通りじや」とこたえているテキスト（佐竹氏旧蔵、茂山千五郎家蔵奥書に「膳所家中　高岡氏　天保八丁酉年八月十五日」）もあるのである。もっとも、『天満千句』では、さらに、

大き成うそをついたる柱口

『伊　文　字』

とつづいて、やはり太郎冠者のにげ口上であったということになるらしい。だから、女が本当に「い」とだけしかいわなかったかどうかという事実問題にこれ以上こだわるつもりはないし、詮索したところで証明はきわめて困難であろう。ただ、「伊ト云テ・なにやらくじ〳〵ト・おしやッた」（天理本）ばかりであったにせよ、「あとを忘れ」（虎明本）たにせよ、すくなくとも「い」をおぼえていたことを、すなわち、女の歌の中に本質的に「い」という謎のふくまれていたことをいま一度確認しておきたかったのである。

なお、参考までに、類曲『二九十八』で女のよんだ歌をあげておこう。

わがやどは春の日ながらみこしぢの風のあたらぬ里ととふべし――春日室町　（天理本）

本曲の場合は、男は第三者のたすけをかりずに即座に謎をといており、もとより謎ときに重点はおかれていない。この場面はせいぜい、歌で返事をするようなゆかしい女性とみせかけておいて、後半で醜女であることの発覚する滑稽を効果的ならしめるための前提であるにすぎない。この点、類曲とはいったが、実は『伊文字』とは対照的な曲なのである。

五

江戸時代以後現在までの狂言は容易にしることができる。その固定期にはいるまでの『伊文字』の姿をこれまで想定してきた。次に、この曲が成立した基盤にメスをあててみたいとおもう。解決の鍵は、いうまでもなく『伊文字』がそれをめぐって展開するところの「恋しくは」の歌にある。

伊勢国飯高郡には、現に伊勢寺（俗に国分寺）という古刹があり、その寺をふくむ部落を伊勢寺村と称している

（現、松阪市伊勢寺町）。寺の旧境内とおもわれる一郭に、通称「井の本」とよぶ井戸があり、側に石碑があって、かろうじて左の文字をよみうる。

井乃本　恋しくは尋てもこよ伊勢の国
　　いせ寺本にすめるわらハを

この碑の建立の経緯や年代については一切不明であるが、ふるい記録として『勢陽雑記』（明暦二）に、

伊文字の狂歌に
　恋しくば尋ねて来ませ伊勢の国伊勢寺もとに住ぞ侘しき（マヽ）
と云ひしも此伊勢寺の事なりと云々。此歌も由緒有る事か。国分寺の傍に小社あり。碑にこの歌を彫付け有りと云々。
（三重県郷土資料叢書13）

とみえるのをあげておく。碑の歌は一見して狂言のそれよりも古態であり、『雑記』のいうとおり、当地の伝承歌に狂言が素材をもとめたとかんがえてよかろう。この点は後にのべる。

次に、おなじく伊勢寺境内の鐘にきざまれた銘を紹介しておこう。

有弁与闍梨者住国分寺、一日抵予之門有請而曰、夫国分寺者聖武皇帝之所建也、……勢之国分在飯高郡霊水之所在也、相伝、光明皇后有疾、索救国分、国分咒霊水而薦之、后疾即愈、霊水者其始不知従孰代而出、国分之初就而井之、飲者沢々不老云、初皇后幸于聖武、婦徳順正容貌姝麗、望之如有光輝、故名焉、迨服霊水身光加明、屢服屢明、嬪御皆大驚焉、后眷々念此水曰、我百年後当往于彼、我雖死我神不朽、令三世諸仏誓水伝注不絶也如此泉矣、至其勧帝為東大及開浴室、行慈行親感見阿閦仏生身、則得神異無方、身在宮中来往此井、人数見之、后崩宮人慕之、思前言而詣茲寺、遶井三匝、恋々不忍去焉、且拝且泣、忽見后出乎

井中如日昇状、離水可三四尺、峩冠瓔珞天衣緋裙、似夢似真、与宮人語、有思我者来我常在茲之歌、宮人顧言后在、則俄然而隠、俗称此井曰在井、又称曰隠井、蓋斯之由也、或曰、是和歌之所謂忘井者、后服之沈痾如忘故云、……

皆享保六年龍集辛丑九月穀旦

勢州雲出川上隠士奥田義胤謹銘

伊勢寺村

金光明四天王護国山国分寺

権大僧都法印弁与敬白

（下略）

この銘は、右にみるごとく、後に国分寺中興の開山と尊称された権大僧都弁与のかたったところを、享保六年、奥田義胤なる者がしるしたものである。井の本の霊水と光明皇后にかかる伝説については、その後、かなり広汎に流布されて信仰をあつめていたらしく、『伊勢名勝志』『勢陽五鈴遺響』『伊勢寺郷土誌抄』等の地誌類にみえ、ことに『伊勢寺記』によれば、寛文九年、和歌山藩主徳川頼宣が、この水のことをききおよび当地をおとずれてこれを服し、殺生禁断の令をくだしたとつたえられる。今日でも土地の古老たちは、この水の霊験を信じてくみにくる者のあったことを記憶しており、同時にかれらは、光明皇后の伝説についても、ほぼ鐘銘にいうとおりのことをつたえている。

ところで、伊勢寺は古代の豪族伊勢直の氏寺で、出土する古瓦、付近になごりをとどめる地名等からおして、壮大な伽藍であったことが推測されるのであるが、中世以後は衰微して廃滅に頻していた。ところが、江戸時代にはいって右の弁与がでて、「伊勢寺」という名を利用して、きわめて巧妙で機微をうがった手段でもって、この古刹をすっぽり一国一寺の国分寺にすりかえてしまった。勿論、伊勢の国分寺は鈴鹿郡に尼寺とならんであったことは、記録、

遺跡の上からうごかしようのない事実なのではある。そうして、光明皇后が病をえて井の本の水を服して本復、それ以来皇后ははなはだこの水をめで「恋しくは」の歌となったという伝説も、実は、おそらく、この弁与あたりがほどこした、国分寺となすための擬装の一つではなかろうかとおもわれる。

というのは、井の本の井と「恋しくは」の歌を光明皇后に託して説明することには、いかにもわざとらしい作為がうかがわれるからである。まず、「恋しくは」が井の本の清水にまつわる歌であることに特にうたがわしい点はないのであるから、歌をこの線にそってよみとることをこころがけよう。すると、きわめて自然に、次のことがみえてくるであろう。すなわち、「伊勢寺本にすめるわらはを」の「すむ」という語が、「住」とともに「澄」の意味をひびかせているという事実である。この歌は、よみ人である女性が井の本にすむことを暗示すると同時に、その水のめでたくきよらかなことを賞した歌であったのである。したがって、「すめるわらは」の「わらは」とは、歌の直接のよみ人である女であり、かつ、井の本の清水そのものであった。叙述を平板にするなら、神聖な井戸と同一視されえた女、具体的にはこの井戸の管理者こそ、歌の真の作者としてふさわしいのではなかろうか。井の本もやはり一種の姥が井のような霊水であったのではないかとおもわれる。

狂言にとられた歌にあっては、「伊勢寺本に澄むぞわらはは」と解釈することは、語法的にいささか無理が生じるようである。もっとも、狂言では井戸のことなど関係ないのであるから「住むぞわらはは」で一向にさしつかえないわけで、このように、住む――澄む、という掛詞を基礎にかんがえてみれば、伊勢寺につたわる歌の方がふるい形であることが、この点からもわかるのである。狂言『伊文字』が、この女の井戸の管理者としての性格をきりすて、男の妻の候補として再構成していく過程で、歌の形が変化したのか、あるいは、すでに狂言以前に「すむぞわらはは」という別の伝承が発生していて、それゆえ霊水への連想が稀薄になっていたのか、先後関係はあきらかにしがたい。

しかし、おもしろいことは、光明皇后が霊水をめでてよんだ歌であると主張する例の銘文においてまで、歌の下三句にあたる部分を、「我常在茲」と訳してすませていることである。この訳が、主述関係において、「すめるわらはを」よりも「すむぞわらはは」の訳としてより正確であるといった姑息な批難をするつもりはないが、「すめる」にしろ「すむ」にしろ、それを単純に「在」としてしまったことで、この歌のもともっていた霊水との内的なかかわりは完全に脱落してしまっているのである。なるほど、光明皇后をめぐる伝説とこの漢訳とは、また、もとの和歌をもふくめて、この訳者のように直接の意味だけをとっておくかぎりは、たがいに辻褄はあうのであるが、上述のごとく歌を解釈するならば、伝説との間にぬきさしならぬ重大な矛盾を露呈してしまうのである。

おもうに、光明皇后であれだれであれ、現に伊勢寺をおとづれた人を前にして「尋ねてもこよ」などというはずはないし、「伊勢寺本にすむ」とあらためておしえる必要もなかったのである。この歌をよみかけられる相手とは、当然のことながら、歌の主をたずねた経験も、たずねる術ももたない人でなければならない。後世あれほど有名であった光明皇后の伝説が、その創作されたとおもわれる時期のわずか数十年前になる『勢陽雑記』になんらふれられていなかったことは、以上の仮定を側面からささえることになろうか。

このように、「恋しくは」の歌を光明皇后に仮託することはすこぶる不当であり、この歌は、こうした作為のほどこされる以前から、井の本の井戸とそれを管理する女性にまつわる伝説の中において、伊勢寺付近につたえられていたとみるべきであろう。それがいかなる物語であったかはしらぬが、すくなくとも井戸と女性とを神聖視した内容であったこと、および、ある場面で女が「恋しくは」の歌をよんでただちに姿をかくしたことの二点は、容易に想像できる。第二の点については、伊勢寺の鐘銘に「宮人顧言后在、則俄然而隠」ときざまれていたのが、そのなごりではないかとおもわれる。狂言においても、「こひしくは……とよみてくれんにうせ」(天正本)たのであるし、御伽草子

や民話の場合もそうであったこと、すでにみたとおりである。よりふるくは、三輪山伝説や信田狐の伝承がやはり同様であった。そうして、これらすべてを通じてまた指摘しうることは、「恋しくは」という暗示的な歌とともに姿をけすことによってはじめて、かえってよみ人はおのれの本性をあかすということである。すなわち、その歌のよまれるまでは、あくまで正体不明の仮の姿としてのみみられているにすぎない。このことは、民話や御伽草子においてたまたまあった女が、実は高貴な出自の、あるいは分限者の娘であったという形式としてのこっているのであるが、やはり本来、神性をおびたものの出現にふさわしい様式であったのであろう。だからこそ、三輪山伝説は化生と本体との複式の能として定着しえたのであり、これに対して、おなじく神秘的な伝承を素材にしつつ神性をきりすてた狂言『伊文字』は、このながれの中でとらえれば、本性をとく鍵をあたえる間狂言にあたる部分を、謎ときを中心に継承発展させたものといえよう。

あたかも、大山信仰にもとづいて中国地方にひろく流布した。

恋しくばたづねてござれ米子迄米子の町のまん中へ

という田唄も、

我が恋は高木の元のたまり水月星ほかに知る人はなし

などという唄とともにうたわれるようになる（牛尾三千夫『大田植と田植歌』）と、やがては恋の歌と解釈されてくるように、神聖なる神の歌も次第に人間界のことをうたった歌へと変質する。そうして「恋しくは」の歌の神秘な暗示性は、言語遊戯としての謎と解釈されるようになり、その線に成立したのが、狂言『伊文字』であり、御伽草子『物く

さ太郎』であり、十七若狭型の民話であった。

古来、女の居所をたずねることが求愛の第一歩であったこと、雄略天皇の例をひくまでもない。それは、どんな時代であれ、氏素性のあきらかでない人間をも愛しうるという、人の心の本来的な自由さに由来する。ことに、中世後期のような身分制度の箍のゆるんだ社会であれば、名もしらぬ女に血道をあげる無頼漢もすくなくなかった。「みめよき、わが目にかゝる」女をとらえて宿元をといつめていく男には、もえさかる精神の昂揚があったし、女の方とて、不逞な男から必死にのがれるにしても、みずから身をゆだねるにしても、あるいは、たとえ反発しつつ心ひかれる結果におちいるにしても、いずれおのれの判断のみを指針に行動するだけの意志が要求されていた。「恋しくは」系の歌は、こうした躍動的な世相を背景に多様な謎の開花をみたのである。民話においては、十七――若狭を核としつつ、地方によって奔放な成長をとげ、歌の定型をおかしてかえりみぬほどであったこと、すでにみたとおりである。また、『物くさ太郎』においては、歌そのものは簡潔であるが、歌の直前に列挙された、松のもと――明石の浦以下多数の謎は、発生史的に、当然歌の中にふくまれていたものがはみだしたとかんがえるべきであろう。これと同様、狂言『伊文字』は、現行曲にみるごとく国里の名をかぞえあげるばかりでなく、ふるくは「い」文字からおもいつくさまざまな解が提示されていたと想定したのであった。

六

大蔵流の三種の寛文以前書上（池田広司『狂言の展開』、『日本の古典芸能4』所収）によると、『伊文字』はいずれも、三番目之類として分類されると同時に、末狂言としても演じられていたことがわかる。このことは、『伊文字』が脇狂言の類についで祝言性ゆたかな曲とかんがえられていた証拠である。たしかに、ひとたび謎ときの話として、御伽

草子や民話とおなじ道をめざしたはずの狂言は、近世以後、燈心ひきの娘という言葉にもっとも発展した当時のなごりをとどめるばかりで、あれこれの地名をこたえる件もリズミカルな謡と舞のおもしろさの陰にかくれてしまった感がある。狂言『伊文字』は他のジャンルのごとく、さらに数おおくの謎を包摂し肥大していくという方向をついに徹底しえなかったのである。「恋しくは」の歌を謎としてとらえることにより、神聖な伝承を人間の次元にひきおろすことに一往は成功した『伊文字』は、謎の要素をふたたび稀薄にしつつ、ただわすれた歌をおもいだすという筋書で解釈されるようになった。そうして、筋の単純をおぎなうためには、一旦すてた神秘の世界へたちもどらない以上、「いやそれにても候はず」と拍子にかかっておもしろおかしくまいくるう、めでたい曲として定着するより道はなかったのである。

その原因の一つとしてかんがえられることは、この曲が伊勢寺につたわる先行の伝承歌につよく依存していたため、発展の余地のとぼしかったことであろう。御伽草子や民話が、「恋しくは」の歌自体を肥大させることによって謎の題をいくらでも豊富にすることが可能であったのに対し、狂言は、「い」という単一の題から複数の解答をこころみる方向にむかわざるをえなかった点に、おのずから限界も生じたことであろう。また、別の原因は、狂言が舞台劇であって、物語でも小説でもないということに帰する。演劇にとって科と白とはいずれもかくことのできぬ要素であるとはいえ、無言劇が存在しえてもその逆が不可能なように、もっぱら言語遊戯によりかかった「をかし」は、狂言の「をかし」として定着しえなかったのである。あたかも、誹諧をテーマとしたいくつかの曲のうち、劇の展開と密接にからみあった内容の表八句がよまれる『八句連歌』が、ある格調のたかさをしめしているのに対し、付合をきかせるために筋が設定されたごとき感の『富士松』が、ほとんど興趣にかけるのと同様である。

そうして、これらの原因の基底にあるものとして、やはり、躍動の時代の終焉と狂言の固定化とを指摘せぬわけにはいかない。中世にあって体制の間隙からほとばしりでた生命の奔流は、やがてそれを打破するにいたったが、新体

制の確立とともにふたたび管理・収束される運命にあった。物くさ太郎に代表される自由な人間精神は、民話という形において伏流水のごとくいきつづけるか、さもなくば、近松の世話物にみるごとく、あやしくも悲劇的な燃焼をもってちりはてる以外に道はなかった。不幸にして、「国々の関さへあがつた」「目出たい御世」をむかえてしまった狂言『伊文字』は、せいぜい優雅で夢幻的な劇としていきのこらざるをえなかったのである。

『一尼公』という草子がある。「つれなしのあまぎみ」とよむその尼の許へ文のつかいを命ぜられた男は、途中その名をわすれ、とおりがかりの人に次々とたずねて、「いちあまぎみ」、「いちにこう」、「ひとあまぎみ」、「かたきなし」、「たゝく」等とおしえられるが、ついにただしいよみ方をきくことができなかった。この話は、訪問先の名をわすれた男のおろかしさよりも、常識でよみ様のない名をよんでみせるという謎ときの興味にまだ重心がある。しかし、男の、最後に折角えた天神の夢想までも、「現になりて顔を撫で、伸をゆたかにかきて、さて御夢想をかうぶりしは、何やらんと思ふに、露ばかりもおぼえず」、ついに任をはたすことをえなかったというにいたっては、『伊文字』の男の末路を髣髴させるものがある。かつては謎をとくために、すくなくとも歌関をすえるだけの積極性をもっていて、物くさ太郎的のさ者にまで成長する可能性をひめていたにもかかわらず、もっとも肝腎な歌の一首さえ満足におぼえられぬまでにおちぶれた狂言の男は、この意味で、やはり物くさ太郎にはにぬ『一尼公』の主人公の双生児であったと断定するほかない。そうして、かれら兄弟のおちゆく先には、「文を、さゝのはにむすびつけて、かつこをもとめ、こしにつけて、たいらりんか、ひらりんか、一八十にぼく〳〵、とはやし事して」大道をいった、例の大うつけがまちかまえているばかりである。

本稿をなすにあたって、資料の閲覧その他に関し、本居宣長記念館長山田勘藏、松阪市深長町笠原士郎、同市伊勢寺町久世源藏、同飯田彰、大蔵流狂言師木村正雄、京都大学助教授佐竹昭廣の諸氏、ならびに松阪市教育委員会、同市立図書館に一方ならぬお世話になった。しるして謝意を表する。